

イギリスの大学入学者選抜プロセス

研究開発部試験制度研究部門 山村 滋

はじめに

本稿では、イングランドとウェールズを中心としたイギリスにおける大学入学者の選抜プロセスとその特徴を述べたい。我が国の大学入学者選抜制度との違いを理解いただけたらと思う。

稿を進めるに当たって、はじめに、いくつかの断りを設けておきたい。

第一に、対象とする選抜制度に関する限定である。イギリスの高等教育制度は、大学部門 (University Sector) とポリテクニク (Polytechnic) に代表される公営部門 (Public Sector) からなる二元制をとってきた。そして、大学入学者の選抜は、U C C A (Universities Central Council on Admissions: 大学入学中央協議会, 1961年設立) という選抜のための事務仲介機関を通して行われ、一方、ポリテクニクの入学者選抜は、1986年度から P C A S (Polytechnics Central Admissions System: ポリテクニク入学機構) という同様の機関を介して行われてきた。ところが、1980年代後半からの一連の高等教育改革を

経て成立した、1992年継続・高等教育法 (Further and Higher Education Act 1992) により、ポリテクニクは学位授与権を有する「新大学」となったが、本稿では、従来からの「大学」の選抜制度、換言すれば、U C C A を通しての選抜制度を中心に扱うことにする。

なお、1994年度からは、U C C A と P C A S の業務は統合され、U C A S (Universities and Colleges Admissions Service) がこの業務を行う。しかし、本稿でみるような選抜のプロセスは、基本的に変更されない。

第二に、選抜のための資格試験制度の限定である。大学入学者の選抜においては、本稿で扱う G C E 試験以外の資格試験による出願も認められ、また成人志願者 (mature applicants) のための入学措置もあるが、本稿では、伝統的な試験制度であり、最も一般的な試験制度である G C E 試験制度について見ていくことにする。

1 大学入学者選抜制度の基本的構造

まず、ごく簡単に大学入学者選抜制度の基本的構造を示しておこう。イギリスでは、共通的な大学入学資格は定められておらず、各大学が個別に入学資格要件を規定している。そして、この要件の下で、各大学は、可否の決定に至るまでに以下の4点を資料として選抜を行っている。

- ①大学や中等学校以外の試験実施機関が行う、科目別の試験（校外試験）の成績。
- ②各志願者の自己申告書の内容（なぜその学科・コースを志願するのか、将来の進路希望、興味関心、これまでの校外試験の成績、これからの校外試験の受験予定科目など）。
- ③調査書の内容（受験予定の科目の成績の予測、資質、適性、動機など）。
- ④面接（ない場合もある）。

なお、志願者と大学の間の、入学者選抜事務のための全国的機関が前述のUCCAである。出願→合格のプロセスを簡略化して示すと、図1のようになる。

以下、GCE試験制度、入学資格要件、出願→合格の過程、を見ていくことにする。

2 GCE試験制度

入学者の選抜に各大学が利用しているのが、GCE-Aレベル(Advanced level)、GCE-ASレベル(Advanced Supplementary level)、GCSE(General Certificate of Secondary Education)という校外試験制度である。この試験の結果は、大学等の上級教育機関における選抜に利用される他、就職のための要件としても利用されている。GCE-Aレベル及びGCE-ASレベル試験は18歳を対象とし、GCSEは16歳を対象とするが、この年齢でなければ、受験できないというわけではなく、それ以前の受験も可能である。また、再受験も認められている。試験は、年2回、夏期と冬期に実施されるが、夏期試験の方が、実施科目は多く設定されている。なお、GCE-ASレベルは、大学入学資格としては、ASレベルを2科目取得でAレベル1科目取得と同等とみなさ

れる。これらの試験は、科目別の試験であり、試験実施団体(examining boards)によって実施・運営されている。現在、GCEの試験実施団体は、イングランドに6、ウェールズに1、GCSEの試験実施団体は、イングランドに4、ウェールズに1ある。試験の成績評価は、グレード(grade)でなされ、GCEはAからEの5段階、GCSEはAからGの7段階が合格とされている。

これらの試験科目の種類は大変に多く、例えばロンドン大学試験評価委員会(University of London Examinations and Assessment Council)の場合、1992年度夏期のAレベル試験において、設定された科目は100に上る。またこれらの試験は、試験実施の2年前までに公表されるシラバス(Syllabus: 試験要目)に基づいてなされる。シラバスには、目的や目標、出題の範囲、評価方法、試験問題の構成、配点などが定められている。このようなシラバスは、中等学校等の教育内容に大きな影響を与えている。

3 大学入学資格要件

以上のような試験の結果を、各大学は選抜に利用しているわけであるが、各大学の入学資格要件(entry requirement)は、次の3つから構成されている。すなわち、①一般要件(general

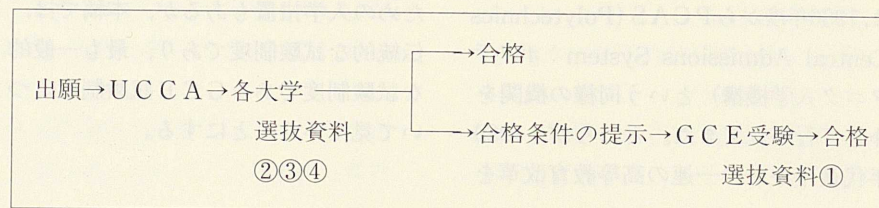
requirements)、②コース要件(course requirements)③年齢要件、の三つである。

一般要件とは、その大学全体に共通の要件であり、これが、その大学で学ぶための十分な一般教育(good general education)の証明と考えられている。一般要件は、大学によって、かなり異なっている。科目数でいうならば、Aレベル2科目から、Aレベル、ASレベル、GCSE等、合わせて5科目までの大学がある。また、ASレベルのみでも一般要件として認める大学も、47大学中17大学存在する。

コース要件とは、ある大学のある学科やコース別の要件であり、大学での特定の専門分野を専攻するための基礎的な学力の証明と考えられている。

イギリスの公式の大学入学案内書(表1の注の文献)には、コース要件のもっとも一般的な場合、すなわち、Aレベル三つ、若しくはAレベル二つとASレベル二つの組合せという場合について、各大学の各コースの要件が掲載されている。例えば、マンチェスター大学の機械工学コースの場合、Aレベル三つ、若しくはAレベル二つとASレベル二つの組合せの中に、GCE-Aレベルの数学と物理を含むこと、そして、もし、Aレベル若しくはASレベルで英語に合格していない場合は、GCSEの英語でグレードC以上

図1 出願→合格のプロセス



であることである。

表1は、コース要件のうち、Aレベルについて、物理学、農学、医学、機械工学、歴史学、英語、経済学、法学の8コースを例にとりまとめたもので

ある。大胆に言えば、コース要件の指定科目数は医学が一番多く、次に、工学・理学・農学系、そして、文学系となり、経済・法学では指定科目数は少ない。

表1 コース別のAレベル・ASレベルの指定科目数(1993年度)

Aの指定科目数 ¹⁾	医 学	機械工学	物理学	農 学	歴史学	英 語	経済学	法 学
3	12							
2	15	29	41	1				
1または2				7				
1		8		2	17	25	2	
0					20	10	41	31
要件数合計	27	37	41	10	37	35	43	31

注 1) ASで1科目代替可能の場合を含む
(出所) The Committee of Vice-Chancellors and Principals of the United Kingdom, *University Entrance: The Official Guide 1993* (Sheed and Ward Ltd., 1992) の該当箇所より作成。

年齢要件とは、その大学に入学を許可するための年齢制限であり、多くの大学では入学年の10月1日までに満17歳であることとなっている。

4 出願－合格の過程

(1) UCCAを通しての志願

次に、出願－合格の過程を見ていこう。入学者の選抜は、先にも述べたよ

うに、UCCAを仲介して行われた。UCCAは、イギリスの大学入学志願者の増加にともない、1961年に設置された機関であり、オープン・ユニヴァーシティを除く、従来からの大学を中心とした入学者選抜の仲介業務を行ってきた。

出願期間は、入学の前年の9月1日から12月15日である。ただしオックス

フォード大学、ケンブリッジ大学は10月15日までである。

UCCAを通しては、五つの大学へ志願できた。このうち、オックスフォード大学、ケンブリッジ大学へは、どちらかへしか志願できない。また、PCASへは、4校まで志願できた。なお前述のように、1994年度からは、UCCAとPCASの業務は統合され、UCASがこの業務を行い8校まで志願できることになっている。

1993年度の願書はA4版4ページのものである。この願書には、選抜のための資料とするために、志願大学・コースの他に、以下の諸点を記入するようになっている。

- ① GCE, GCSEの成績及びこれからの受験予定。
- ② 志願者の情報(なぜそのコースを志願するのか、将来の希望進路、興味関心など)。
- ③ レフリーによるコメント

(References)(受験予定のGCE試験の成績予測、資質、適性、動機、等)。

なお、レフリーによるコメントは、通常、その学校の校長あるいは教員が、志願者から願書を受け取り、作成する。そして、学校を経由してUCCAへ郵送される。このコメントは、我が国流に言えば、調査書といえよう。

(2) 各大学における選抜

この願書をもとに各大学の学科・コースで選抜が行われる。

12月15日までに願書を提出した者に対しては、4月の初旬までにその結果が示される。結果には以下の3種類がある。①合格(Unconditional Offer)、②条件付合格(Conditional Offer)、③不合格(Rejection)。合格とは、志願者はすでに、大学側の要求を満たしている場合である。条件付き合格とは、志願者に対して、今後の受験予定の校外試験に関して一定の成績を要求するものであり、通常、以下のように、その条件はグレードで示される。

例1: 化学においてB, 物理においてCであること。

例2: Aレベル3科目においてBCDであること。

さて、以上のような条件の提示、換言すれば、選抜の過程において、どのような要素が影響を与えるのであろうか。イギリスの大学においては、各学科・コースでこの選抜が行われる。そこにおいて、実際の選抜は、アドミッション・チューター(Admission Tutor)とか、セクター(Selector)と呼ばれる者に委ねられているが、通常、現職の教員がこの仕事を担当する。

このような選抜担当者は以下の要素を考慮して選抜を行うといわれる。

・レフリーのコメント

- ・試験の成績の予測
- ・すでに取得した試験の成績
- ・志願したコースへの受験科目の適合性
- ・志願コースの一貫性（5つの大学のコースの）
- ・動機付け
- ・個人的情報（経験、興味、など）
- ・面接の結果（実施された場合）

以下、イギリスで発行されている大学入学案内書をもとに詳しく見ていこう。

①レフリーのコメント

これについては、以下のような点が考慮されるといわれる。

a) 学問的能力

志願者がすでに受験した校外試験の成績は、志願者の能力・努力の正しい反映だと、志願者の在籍する学校はみなしているのか否か。Aレベルの学習活動において成果があがっているか否か。学位コースでよい成績があげられると学校は考えているのか否か。志願者の長所・短所。受験予定のAレベルでは、どの程度の成績（グレード）を取得すると学校は予測しているのか。

なお、このグレードの予測が、例えば、3科目においてすべてグレードDであったりすると、高倍率のコースでは、不合格となるであろうといわれている。

b) 学問・学習に対する姿勢・態度

c) 動機付け

志願者の、志願した学位コースに対する熱意、大学に志願するための努力、志願理由など。

②校外試験の記録

この欄は、選抜担当者が詳細に検討する。そして、校外試験の結果については、不合格も記述しなければならない。

GCSEの結果については、以下の点が検討されるといわれる。

a) 幅の広さ

ほとんどのコースで、5科目でグレードC以上が実際上必要になる。しかし、大抵の志願者は、もっと多くの科目のGCSEを取得している。ただし、多くの科目において低い成績で合格するよりも、それよりも少ない科目数であっても、成績の高い方が有利になる。

b) 得意科目・不得意科目

特に、不得意科目が検討される。例えば、英語コースに志願しているのに、語学が不得意科目であったとすると問題となる。

c) Aレベルの基礎学力があるか否か

通常、AレベルにつながるGCSEの科目では、グレードAもしくはBが期待される。

d) キー科目

数学と英語は、キー科目である。

③受験予定科目

何科目Aレベル・ASレベルを取得予定なのか。入学資格要件・条件提示科目を満たす科目を取得予定か否か。GCSEに関して、重要な科目をまだ取得しようとしているかどうか。

なお、条件付き合格が出される場合には、GCSEのある科目を取得してない時には、その取得も条件として示される。

④志望コース

先に述べたように、UCCAを通して、5つの大学のコースを志望できるが、そのコースの一貫性が問われる。

⑤志願者の興味・関心などの個人的情報

願書のセクション9は、志願者が自分自身について説明する欄である。この欄の内容は、上記の4点に比較すると、その重要性は低い場合が多い。しかし、面接に際してや、あるいは、校外試験の結果が出た後、志願者がボーダーラインに位置する場合には、その内容が合格に寄与することもあるといわれる。

この欄には、志願者が何を印象付けたいのか、アドミッション・チューターが関心を持ちそうなこと、面接で話したいことなどについて記述するのがよいといわれる。志願したコースと関連した興味や活動、将来の職業などに

ついて強調することがよい。もし、学校での活動より、学校外での活動の方が重要ならば、その点にふれるのが良いといわれる。

以上のような観点等が考慮されて、また、面接が実施された場合には、その結果も考慮されて、合格条件が提示されることになる。

その際、志願者一人一人に同じ条件が提示されるとは必ずしも限らない。アドミッション・チューターによっては、志願者の能力・学力等に疑問がある場合には、標準的に要求するグレードの水準よりも高いグレードを提示する場合もある。また、通常よりも、低く条件提示をすることもある。このように、アドミッション・チューターの裁量が大きくはたらく。

5つの大学からの通知がそろったところで、志願者は入学志望大学を決めねばならない。この通知は正式にはUCCAを経由してもたらされる。12月15日までにUCCAに願書を提出した者は、先に述べたように、4月の初旬までにはその結果が志願者に知らされる。この段階で、合格とされた大学に入学することを決めれば、その大学への入学が確定する。複数の大学から合格、あるいは合格条件の提示があった場合には、第一志望、第二志望までを決めることができる。合格の大学を第二志望としておくこともできる。なお、ど

の大学からも条件提示がなかった者は、9月の2次志願（2次募集）に出願できる。

さて、校外試験の結果は8月下旬に出るが、条件付き合格の場合には、条件を満たしていれば、その大学に合格となる。また、その合格条件にやや欠ける場合でも、籍に余裕があれば、合格となることもある。この段階で、不合格となった者は、9月の2次志願（2次募集）に出願できる。

ところで、例えば、合格の条件が3科目でBBBであった場合、試験の結果がBBBであれば、もちろん、合格となるが、AACであった場合はどうなるであろうか。この場合は、合格条件は満たしていることにはならない。三番目の科目が、条件以下のCである

からである。以上のような出願－合格の過程において、合格、不合格となる者の割合はどうであろうか。1991年度においては図2に示すように、志願者総数、236,111人のうち、1991年6月の時点において、合格者は、24,327人（10.3%）、条件付き合格者は152,049人（64.4%）、不合格者は、49,829人（21.2%）であった。そして、条件付き合格者のうち、最終的に合格とされた者は、91,591人（志願者全体の38.8%、条件付き合格者の60.2%）に対して、不合格となった者は59,523人（志願者全体の25.2%、条件付き合格者の39.1%）であった。このように、条件付き合格者が圧倒的に多いのは、志願者の多くが、まだGCEの受験前だからである。

図2 1991年度における合格者・不合格者

1991年6月	合格 ¹⁾ 24,327人	条件付き合格 152,049人	不合格 49,829人
		↓	↓
8月		合格 91,591人	不合格 59,523人 (辞退者935人)

注 1) この時点までに辞退した者を除く。

(出所) UCCA, *Twenty-ninth Report 1990-91* (UCCA, 1992), p.7より作成。

おわりに

以上、イギリスの大学入学者の選抜を、そのプロセスから見てきた。学力試験は大学外部の試験実施団体に任せている点、選抜の任務はアドミッション・チューターに委ねられている点、合格条件の提示に至るまでに各種の資料を用いて長い時間をかける点、合格条件が学力試験の受験前に提示される点など、我が国の大学入試とはかなり異なったものであることが理解できよう。今後は、このようなイギリス式システムを成立させている基盤、要因を明らかにしていくことが必要とされよう。その際、UCCAの事務局長(General Secretary)を務めたR. ケイ (Ronald Kay) 氏の、合格条件の提示に至るまでに各種の資料を用いて長い時間をかけることについての次のような言葉は、イギリス式システムをより深く理解するために一つの手掛かりを与えてくれ

るように思う。氏の言葉を借りて、本稿の結びに代えたい。

「このような選抜方法の目的・根拠は、志願者一人一人を単なる受験者としてではなく、一人の人間とみなそうとすることにある。個性、あるいは、各個人の事故や苦労を可能な限り斟酌したり、能力がまだ開花していない者や隠れた天才に対しても注意深く目を向けようとするのである。」

注) 本稿は、拙稿「選抜プロセスから見たイギリスの大学入学」(平成4年度文部省特定研究成果報告書『大学における入学者選抜方法に関する研究』, 研究代表者 渡部 洋東大教育学部教授, 1993年3月)をもとにして、紙数の関係で、引用注等を省略したので、詳しくは上記の拙稿を参照されたい。